

山 法 師

松林尚志句集



外題の山法師は、我が家の前に並木があり、初夏の季節になると清楚な白い花を咲かせ、心が洗われる感じがあって好きな樹である。

この集には山法師を詠んだ句を幾つか載せている。そんなことから迷わず決めた。(あとがき)

平成一五年より三〇年までの
七〇五句を収録。

棕
櫚
の
葉
の
一
つ
震
へ
る
二
日
か
な

暖
か
さ
う
な
マ
ダ
ム
羊
が
初
夢
に

ゆるやかに櫂を漕ぐなり大冬木

凍土を掬ひほぐして誕生日

冬桜欣之介書の独歩の詩

冬の雨貧しき浜の金目鯛

眠る山妻は兎と跳ねをらむ

永訣や残雪の畑どこまでも

青山二丁目風縦横に茂吉の忌

啓蟄や虫の一匹旗を振る

瞑想の墓ながながと卵産めり

春の雪睫毛を濡らす窓あらむ

黄塵やユーフラテスに滴る血

花散るや阿漕の面の瘦せ男

塩辛き壮の日たりし海市たつ

驢馬の背ほどの鞞鞞揺すつてみる

ふところを過ぎる弾丸夕燕

森の享く雨のざわめき二輪草

夏蝶のいろいろと会ふ手児奈の里

粗塩や焼き上りたる鮎の反り

三伏や焦らず生きよと亀浮けり

たましひの皮膜に灯る蛍かな

若き母白くいませり半夏生草

木道に昨夜の湿り蝸牛

高原の血痕としてサルビアは

地下茶房蝙蝠臭き貌ばかり

稲妻の焼き入るたび天冥し

今朝の秋布衣の雀も来てゐたり

破れ芭蕉仁王立ちして山頭火

夜間飛行機火星にめくばせしてさやか

紙縫にて稿綴ぢし日や瀬祭忌

オルゴール聞きゐる風の吾亦紅

霊園のしじま秋蟬耳鳴りへ

むかご飯野の髯面が口中に

黄金田や女神の臥せしあと残る

しなやかに生きよと鱒の秋水に

露けしや富士胎内の溶岩の貌

木の国の木はみな仏冬に入る

さかしらの猿も頬染む年酒かな

まだ蜀を望む泥葱ぶらさげて

水仙や地蔵に朝の湿りあり

春立てり象のはな子に会ひに行く

象嵌の象の眼があり涅槃西風

春の富士波郷の墓ははけの辺に

行く春や反故ほうごの積もる身のほとり

おぼろ月天のまほらを歩み行く

パンの耳鯉に食はせて五月病

リュックには餡パン一つ山法師

反芻の語を反芻し日陰に犀

穴熊の暗き眼と会ふ走り梅雨



句集 山法師 やまほふし

二〇一九年九月二十五日第一刷

定価 本体二七〇〇円＋税

●著者——松林尚志

●発行者——山岡喜美子

●発行所——ふらんす堂

〒一八二一〇〇〇二東京都調布市仙川町一―一五―三八―二F

TEL 〇三・三三三六・九〇六一 FAX 〇三・三三三六・六九一九

ホームページ <http://furusudo.com/> E-mail info@furusudo.com

●装幀——和 兎

●印刷——日本ハイコム株式会社

●製本——日本ハイコム株式会社

落丁・乱丁本はお取替えいたしません。

ISBN978-4-7814-1207-8 C0092 ¥2700E

著者略歴

松林尚志（まつばやし・しょうし）

1930年、長野県生まれ。慶應義塾大学経済学部卒業
現代俳句協会、現代詩人会、三田俳句丘の会の各会員
俳誌「木魂」代表、「海原」同人

著書 句集『方舟』（1966）

『冬日の藁』（2009）

詩集『木魂集』（1983）他

評論『古典と正統』（1964）

『日本の韻律』（1996）

『子規の俳句・虚子の俳句』（2002）

『斎藤茂吉論 歌にたどる巨大な抒情的自我』（2006）

『芭蕉から蕪村へ』（2007）

『俳句に憑かれた人たち』（2010）

『和歌と王朝 勅撰集のドラマを追う』（2015）

『一茶を読む やけ土の浄土』（2018）他